

「化けもの屋敷」は吉田健一（1912-77）最晩年の短編小説である。初出は『海』1977年3月号で、その年の8月に著者が亡くなった後、11月に短編集『怪奇な話』（中央公論社）の一編として出版された。以降、文庫（中央公論社）や著作集（集英社）、集成（新潮社）などとして再版されているが（いずれも現在品切れ）、今回は単行本版の旧字体の魅力が捨てがたく、版元の許可を得て旧版をそのまま転載させていただいた。ただし、判型が四六判からA5判に変わったことを考慮して、版面を110%に拡大している。

「化けもの屋敷」を『建築と日常』なりに一言でいえば、「家というものを介して現在する歴史を象徴的に描いた小説」となるだろうか。この特集で再録を望んだのはそんなふう考えたからであり、吉田健一の歴史観はこの特集の思考に強く響いている。小説の解説をすることはままたらないが、ともかく作品に流れる時間を感じながら丁寧に読んでもらえたらありがたい。句読点が少なく途切れずに続いていく独特の文体は、ものごとが渾然一体となって連続していく時間のあり方をそれ自体に内包していると思う。

吉田健一の作品世界において重要な概念である時間や歴史は、しばしば建築や都市の描写のなかに見いだすことができる。「化けもの屋敷」ではそれが一軒の家に凝縮されていたが、「化けもの屋敷」の空間的・時間的スケールを大きくしていくと、『瓦礫の中』（1970）、『金沢』（1973）、『東京の昔』（1974）といった長編小説の都市的世界が現れてくると言えるかもしれない。それらはみな日常という地平で連続している。

